プンダリーカ
－白蓮華－
第９１号　令和７年 1月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

元旦

元 龍谷大学講師　辻本　敬順

新年、おめでとうございます。

「一年の計は元旦にあり」という諺があります。皆さんは、今年、どんな計をお立てになったのでしょうか。「今年から日記をつけよう」「今年から禁煙をしよう」「今年から禁酒をしよう」などなど……。しかし、あまり成功した試しがないのです。皆さんはどうですか。

この諺は正式には、

一日の計は朝にあり、
一年の計は元旦にあり

と言います。一日をどう過ごすかという計画は朝に、一年を通してどう過ごすかという計画は元旦に立てるのがよい。何事にも初めが肝心で、初めに周到な計画を立て準備をするべきである、という意味の諺です。

中国には、

一年の計は春に存り、
一生の計は勤（勤め）に在り、
一日の計は寅（早朝）に在り

という文があります。ここでいう「計」は「生計」のことで、「一年の生計は春の耕作にかかっている。もし、春に耕さなかったならば、秋の収穫は望めない。同じように、一日の生計は早起きに、一生の生計は若いときの勤勉にかかっている」というのです。

お釈迦さまの弟子サミッディは、王舎城の温泉精舎にいました。そこへ天人がやって来て、「お釈迦さまに『一夜賢者の偈』を教えてもらえ」と言います。その偈が『大迦旃延一夜賢者経』にありました。

過去を追うな。
未来を願うな。
過去はすでに捨てられ、
未来はまだ来ない。

だから、ただ現在のことを
ありのままに観察し、
動揺することなく、
よく理解して、実践せよ。
ただ今日すべきことを熱心になせ。
明日、死のあることを誰が知ろうか。
かの死神の大軍と
会わないわけはない。
このように考えて、熱心に
昼夜おこたることなく励む人、
このような人を一夜賢者といい、
寂静者、寂黙者と人はいう。

（『阿弥陀経のことばたち』三六頁　参照）

新しい年を迎えて、こころ新たに決意を固めるのはたいへん素晴らしいことですが、それを実行するのは、今日一日の生き方にかかっているようです。一年は一日一日の積み重ねですね。

『行事法話集　人生の折々に』（本願寺出版社）より引用

令和五年一月に、山門前の伝道掲示板へ、
【「今年こそ」は「今日こそ」の 積み重ね】
と書きました。併せてご紹介いたします。住職

プンダリーカ
－白蓮華－

第９２号　令和７年２月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

恩師のまなざし

本願寺派 司教　武田　一真

これは利井明弘先生にお聞かせいただいた話ですが、お父様の利井興弘先生の三回忌のときのことです。お寺さんもたくさん集まってこられ、大坂のご自坊でご法要が勤まりました。ご法要が終わりまして、みなでお斎をよばれましょうという場面になりました。お斎の準備は、ご門徒のあるお婆ちゃんが指揮をとってご準備くださったようです。みな席につきまして、明弘先生が「きょうはみなさん、ありがとうございます。父もご往生させていただいて、三回忌を迎えました。きょうは懐かしいお話など聞かせていただきたく思います」とご挨拶をされまして、食前のことばを唱和して、合掌して「いただきます」とお弁当箱のフタをとるわけですが、そのときあちこちから「あっ」と声が上がったそうです。なかはバラ寿司だったそうです。亡くなられた興弘先生はたいへん有り難いかたであったそうですが、同時に厳しい方でもあったようです。お仏事のときお肉やお魚、雑のものを許される方ではなかったわけですね。みんなよく知っておりましたから、当然今日はお精進だと思っていたわけですが、バラ寿司だったわけで、卵や穴子や、かまぼこなどがのっていたのでしょう。「あっ」と声があがる。その声を聞いて、調理場におられたそのお婆ちゃんが飛んでこられて、みんながおられる前で、畳にひたいをこすりつけるようにして、「申し訳ございませんでしたー！」と仰ったそうです。何か手違いがあったのだろうな、ということはすぐわかりましたので、「まあまあ、こういうこともありますから、いいですよ」とみんなお婆ちゃんをなだめたそうですが、お婆ちゃんは「申し訳ございません！すべて取り換えさせます」と一歩も引かれなかったそうです。そう言いましても、みんなもう席についているわけですから、どうにもなりません。押し問答になり、みかねた施主の明弘先生が、「まあまあ○○さん、父もきびしい人やったけど、もう亡くなって、今日は三回忌や。きょうはこれでええにしましょうや」と気を遣って言われました。するとお婆ちゃんは一言、「お亡くなりになられた、いうことは、今ここにおられる、いうことですな！こんなに恥ずかしい話はありません！」と仰ったそうです。（中略）お婆ちゃんは、目には見えないけれども、「なんまんだぶつ」「なんまんだぶつ」このお念仏の声のなかに、仏さまとなって還りきたって、寄り添いつづけ、導きつづけ、見守りつづけてくださってある先生と、ともに生きておられたということでありましょう。

『情をもってねがいて趣入すべし』（藤鷲会）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

プンダリーカ
―白蓮華―
第９３号　令和７年 3月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

人生の日暮れ

本願寺派 勧学　深川 宣暢

私も少し年をとりましたから時々、寝ながら考えます。布団かぶりながら、このまんま、目が覚めなんだらどうしよう、どうなるだろうか、ちょっと準備しておかないかんことあるな、こういろいろ考えながらも、でもよく考えたら、生まれてきた時には何にも持たずに真っ裸で生まれてきたじゃないか。その間には、いろんなものを着せてもろうたり、脱がせてもろうたり。今度は自分で着るようになり、脱ぐようになり。あるいは柱を立てて屋根を葺き、そうやっていくけれども、終わっていくときには、また何にも持たずにたった一人で真っ裸で終わっていくのですよ。これが我々のすがたですよ。生きている間の人生が良かろうが悪かろうが、立派なことをしようがすまいが、人から褒められようが褒められまいが、全く無関係に、たった一人で出かけねばならんのが私どもです。

でも、良かったですね。私どもは一人じゃないですよ。あなたが生まれる前も、生きている今も、そして死んでいった先も、「私はあなたとともにあるのですよ」というナンマンダブツの如来様が、私に届いていてくださるのです。（中略）

「親のない子は磯辺の千鳥　日暮れ日暮れに袖しぼる」という歌があります。親のない子、世の中では一人子、孤児、みなしごなどと言われますが、その子であっても、昼間のうちは近くの子どもたちを集めて、あっちへ遊び、こっちへ遊びと、ちょうど千鳥が群れをなしてチーチーと飛びまわっているように過ごしておるけれども、その子が寂しいのは日暮れです。夕暮れです。親のあるところからは声がかかる。さあ早う帰っておいで、ごはんにするぞ、早う帰ってお風呂に入りなさいと、声がかかるが、親のない子がおったとすれば、その子は誰が呼んでくれるのか、誰が私を育ててくれるのだろうか。その子が寂しいのは日暮れだという歌です。「日暮れ日暮れに袖しぼる」という、千鳥が虫をつむいでいるのか知らんけれども、それが泣いている姿に見える、という歌ですね。

人生の日中には、あるいは人を引き連れ、あるいは人の上に立って、あるいは友人たちと一緒にあっちへ遊びこっちへ遊びするかもしらんけれども、もし本当の親様を持たないならば、寂しいのは日暮れですよ。人生の日暮れは寂しいぞという歌です。私どもは如来様がおいでよかった、親様を持っててよかったですね。

『情をもってねがいて趣入すべし』（藤鷲会）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

※文中にある歌は以前に作られたものであり、現在は児童養護施設等が充実し、子ども達の暮らしも支援されています。住職

プンダリーカ
－白蓮華－
第９４号　令和７年４月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

お釈迦さまの像がない？

本願寺派 勧学　内藤 知康

浄土真宗の教えは、阿弥陀さま一仏に帰命し、他の仏・菩薩には帰命しないというものです。しかし、それはお釈迦さまをないがしろにしているということではありません。

浄土真宗において、お釈迦さまと阿弥陀さまとの関係は、いろいろに考えられます。たとえば、お釈迦さまのお仕事は教えるということであり、阿弥陀さまのお仕事は救うということです。お釈迦さまが何を教えられるのかというと、「一切の生きとし生けるものを救おうという願いを発し、その願いを完成された阿弥陀さまというお方がおられるよ」ということを教えられるのです。言い換えますと、「阿弥陀さまに帰命しなさい」と教えられるのです。私たちが阿弥陀さま一仏に帰命するのは、お釈迦さまの教えにしたがっているのですから、決してお釈迦さまをないがしろにすることにはなりません。（中略）

親鸞聖人がいただかれた阿弥陀さまの他力の救いは、私たちの力が役立つのではなく、ただ阿弥陀さまの力のみによって救われるというものでした。つまり、迷いから悟りへ歩むのに役立つものを何一つとして持っていないものが救われる教えです。浄土真宗では、阿弥陀さま以外の仏さまにはこのような救いはできないといただいています。お釈迦さまの教えも、阿弥陀さまの救いについて以外の教えは、自分の力を役立たせて悟りへ向かって進むというものばかりです。

このような救いを成り立たせている阿弥陀さまの願いは他にありませんので、親鸞聖人は、「越世希有」つまり、「世に超えてまれな」と仰いでおられます。ですから、自分の力ではどうにもならない私たちが阿弥陀さまに帰命し悟りに至ることができるようになってこそ、お釈迦さまに本当に喜んでいただけます。このことこそがお釈迦さまの願いに本当に応え、お釈迦さまの願いを大事にすることなのです。

親鸞聖人はまた、お釈迦さまというお方は、私たちを救うために、阿弥陀さまがこの世界におすがたを現されたお方であるといただいておられます。つまり、お釈迦さまは、そのまま阿弥陀さまだということなのです。

まとめてみますと、弥陀一仏への帰命は、お釈迦さまの教えにしたがうということであり、またお釈迦さまの像を安置しないのは、お釈迦さまがそのまま阿弥陀さまであるからなのです。

『どうなんだろう？親鸞聖人の教えQ＆A』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

※四月八日は、お釈迦さまがご誕生になられた日「仏生会（花まつり）」です。　住職

プンダリーカ
－白蓮華－
第９５号　令和７年５月
浄土真宗本願寺派 西照寺
saishoji.info

光いっぱいにしていく責任者

兵庫県東光寺　元住職　東井　義雄

皆さん、東昇先生という先生のお名前、聞いたことありませんか。京都大学の名誉教授で、一ミリの百万分の一、こんな小さな世界を研究していらっしゃる先生です。日本ではじめて電子顕微鏡をおつくりになった先生です。

この東先生がね、猫は生まれてすぐ人が育てても猫に育つ。犬は生まれてすぐ人が育てても犬に育つ。ところが、人間は人間の子に生まれたからといって、人間に育つとは決まっていない。今日の学者の定説では、約五千通りの可能性を持って生まれてくるとおっしゃっているんです。

東先生のそのお言葉を読ませていただきながら、思い出しましたのは、今から五十年あまり前、インドの山奥で、狼の住んでいるほら穴から、二人の人間の女の子が発見されました。狼が、赤ん坊をさらっていって、穴の中で育てていたんです。

小さな赤ん坊を育てて、ずいぶん長い間育てられたんでしょう。推定八つばかりになっていたんですが、人間の世界に連れ戻されて、一生懸命人間に育てる教育をやったんですが、とうとう二人とも、人間に戻りきることができないで亡くなってしまいました。真っ暗闇の中でも、目がらんらんと光って、何でも見える。何十メートル先にある餌が、鼻でわかる。

餌があるぞということがわかりますと、八つばかりになっていたその女の子も、二本の足で立つこともできないものですから、四つ足で、ものすごい勢いで、飛んでいっても、手を使うことができません。貪り喰う。夜中の一定の時刻になると、遠吠えをやる。人間に生まれても、狼が狼の暮らしの中で育てると人間の子も狼になる可能性さえ持っているんですね。（中略）

その五千通りの可能性の中からね、どんな自分を取り出していくか。皆さん一人ひとりがその責任者なんですよ。皆さんこんなたくさんいるように見えますけどね、自分は一人しかいない。

大阪のＮＨＫから招かれて出向きました。国鉄大阪駅の地下を歩いてますとね、たくさんの人が、ぎっしり歩いている。その時に感じたんですが、同じ人は一人もいないんですね。皆さん一人ひとり違うんですね。こんなにたくさん人がいるのに、同じ人が一人もいない。

その時はっと気付いてみたら、私も世界でただ一人の私なのだということでした。その世界でただ一人の私を、どんな私に仕上げていくか。その責任者が私であり、皆さん一人ひとりなんです。

『正直者からは正直者の光が』（探究社・法蔵館）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています
また、当時の呼称のまま掲載をしています

プンダリーカ
―白蓮華―

第９６号　令和７年６月

浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

故人の想い出に聞く

龍谷大学　名誉教授　浅井　成海

親鸞聖人が八十八歳の時、乗信房にあてたお手紙の中に、故法然聖人の仰せとして、

浄土宗の人は愚者になりて往生す

（「註釈版聖典」七七一頁）

と書いておられます。

親鸞聖人が法然聖人と生き別れとなられたのは三十五歳の時ですから、すでに五十年余りもたっていました。

しかし、八十八歳となられてなお、いきいきと法然聖人の言行を記録しておられるということは、常に法然聖人に遇い続けられたのだと言えましょう。

お念仏申し、お念仏に聞くところに、常に故人と会話し、出遇っていかれたとみることができます。

「お念仏に聞く」とは何を聞かせていただくことでしょうか。

善導大師のお言葉に「二河白道」のたとえがあります。それは、お釈迦さまと阿弥陀さまのお勧めによって「浄土のみ教えを依りどころとせよ」と喚びかけてくださることなのです。また、み仏さまの大慈悲心に遇い、み仏さまが私に尽くしてくださるいろいろな手だてをお教えくださることなのです。

親鸞聖人はお念仏の喚び声の中に、法然聖人の言行と出遇っていかれました。そして、法然聖人は阿弥陀さまの化身で、勢至菩薩が法然聖人となって私にみ教えを伝えてくださった、と受けとめられたのでした。

最近、同居しておられたお義母さんを亡くされた方から、「長年生活をともにしてきましたので、義母の想い出は尽きません。浄土真宗では義母が私たちのところに還ってきて、私たちを導いてくださるという還相回向の教えを説きますが、どのように聞かせていただいたらよいのでしょうか」と少し涙ぐんでのご質問を受けました。

私は「お念仏申させていただき、お念仏を聞かせていただく中に、いろいろと会話をしたり、想い出させていただくことではないでしょうか」と申し上げました。

「あんなこともあった。こんなこともあった。あのようにも話していたな」と故人への想い出は尽きませんが、常に故人と会話し、故人を偲ぶということは、帰するところはお念仏に聞くところからお教えいただきます。

もちろん、特に故人の日常の言行を想い出すというよりも、み教えにかかわるいろいろな想い出をよみがえらせることになります。（中略）

お念仏に聞く生活の中で、今は先人のはたらきを還相の菩薩の姿として聞かせていただくのです。先人より一つ一つお教えいただいています。

『浄土真宗　やわらか法話2』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

プンダリーカ
－白蓮華－
第９７号　令和７年 ７月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

念仏の申される人生

本願寺派 勧学 梯 實圓

法然聖人が、「この世のすぐべきようは、念仏の申されるようにすぐべし」と言われています。「お念仏の申される人生ならば、どんな生き方をしようと、すばらしい人生である」と言われています。「その人その人によって、どんな生き方をするかはみんな違う。それぞれ生きられるように生きればいいのだ。しかしその中で、お念仏が申せる人生、お念仏に統合された人生を生きなさい。如来さまに喚び覚まされながら、導かれる人生を生きることが尊いのだ」と言われています。

「お浄土へ往くのだから、この世はどうでもいい」とは言わない。病気をした時に、「お浄土参りを目指している人間が、薬を飲んでもいいのですか」と法然聖人にたずねた人がいました。そう聞かれた時、法然聖人は、「お念仏の申せる体を大事にしなさい」とおっしゃっています。仏さまの教えを確かめていく人生は大切な道場であるというのでしょう。お念仏の申せる体をいとわなければならない。そのためには、薬も飲みなさいとおっしゃっても大事にしなさいとおっしゃっています。「欲を起こすための体を養うのとは違う。腹を立てるための体を養っているのとは違う。み教えを聞き、お念仏の申せる体を養っているのだ」と法然聖人はおっしゃっているのです。

このあたり、念仏の人生という一本の筋がきちっと通っていますね。できればそのように思ったほうがいい。「なぜ薬を飲むのか」と聞かれたら、「お念仏を相続させていただくのだから、薬を飲まなければ」と言うのですよ。ですから、死に急ぎすることはないのです。教えに呼び覚まされる人生は楽しいものです。また死すべき時が来れば、受け容れればよろしい。さとりの開けるご縁として、死をありがたく受け容れればよろしい。その時、死は空しい亡びではなく、真実に目覚めた仏陀としての誕生の意味を持ってきます。

生きるということは、仏さまのみ教えに導かれながら、極楽に生まれて往く、浄土に生まれて往く人生を生きていくことです。死ぬことは、浄土が開けるご縁である。となりますと、生きることも死ぬことも一つの念仏に統合された、「生死を超えた生」になります。そのような人生を生きていくことが、「往生極楽のみち」というものです。それをはっきりと聞き質し、それさえはっきりとしていれば、あとは何が起ころうとも、それはその時その時解決すればいいのです。人生の一番の根幹は、生と死を包む一貫した道を確かめていく、それが一番大事なことです。

『『歎異抄』師訓篇を読む1」（自照社出版）より引用

プンダリーカ
－白蓮華－
第９８号　令和７年８月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

叱られた恩を忘れず墓参り

相愛大学　学長　釈　徹宗

「叱られた恩を忘れず墓参り」とは、奥行きのある心情が伝わる、なんとも言い難い味わいを感じさせる川柳ですね。まず「叱られた恩」と語るところに妙味があります。我々は、なかなか「叱られた恩」などといった気持ちになれませんからね。

「恩」という漢字は、先人からのめぐみや慈しみを表しているそうです。「因」は、敷物の上に、人が両手両足を拡げて、全身でめぐみや慈しみを受けている姿からできているとのこと。

「叱られた恩」とは、叱られたことがめぐみや慈しみであると語っているのです。これは「叱った方が、本当に相手を思って叱った」と「叱られた方が、叱ってもらって有難かった」との、二つが合わさらないと成り立たない事態だと思います。

仏典に出てくる「恩」という言葉ですが、サンスクリット語のクリタの翻訳語として使われます。クリタは、〈先人が私のためにしてくださったこと〉といった意味になります。また、クリタジュニャという用語もあります。これは〈先人が私のためにしてくださったことをしっかりと受けとめる〉というような言葉ですので、「知恩」と訳されています。

日本仏教には、「知恩報徳」といった教えがあります。この場合の「徳」は〈周りに与える良い影響〉といったところです。つまり、「知恩報徳」は、先人から私へと出されたパスをきちっとキャッチして、そして私の周りへとパスを出していく、そんな態度のことになります。

私の友人に有名な元ラグビー選手がおります。もう現役を引退して、大学の教員をしています。その友人が、「ラグビーボールは楕円形なのでとても扱いが難しい。その扱いが難しいものを、丁寧にパスをつないでいくところにラグビーの魅力と喜びがある」と言っていました。「心のこもったパスと、雑に出したパスは、キャッチした時にわかる」のだそうです。

先人から出た仏法というパスをきちんと全身でキャッチして、周りへと次世代へと心のこもったパスを出していく。これは、今を生きる、我々の一つの果たすべき役目ではないでしょうか。

仏法は、二千五百年以上にわたって、鍛錬に鍛錬が重ねられてきた体系です。人類の知恵の結晶といってよいでしょう。そこには本物の言葉があります。本物の言葉は、その時すぐにピンとこなくても、心身に潜んで、いつか花咲くことになります。「叱られた恩を忘れず墓参り」の句を詠んだ人も、おそらく本物の言葉で叱られたに違いありません。ですから、「本物の言葉を聞く」「本物の言葉を語る・伝える」という体験が大切になってくるわけです。

『みちしるべ名講話選　縁』（仏教伝道協会）より引用

プンダリーカ
―白蓮華―

第９９号　令和７年９月

浄土真宗
本願寺派
西照寺
saishoji.info

現在に生きよ

本願寺派　勧学　村上　速水

かくて「諸行無常」という言葉は、「いたずらに昨日を思いわずらってはならぬ。また明日への空しい夢をいだいてはならぬ。ただ、今の一瞬に全力を注いで生きよ」と教える言葉であります。まことに現実逃避どころか、現実の私を最も意義あらしめよと教えるのが仏教であり、そこに生活の指導原理としての諸行無常のことわりがあるのであります。

これに関連して、近ごろ私が感銘した話があります。これは先年、戦後の中国事情を視察して帰られたT氏が、その書物の中に書いておられた話なのですが、それによりますと、現在の中国の小学校四年の教科書の中に

春は四季の中で一番よい季節である。

という言葉が載っているそうです。ただそれだけの文章ならば、わざわざとりあげる必要はないのですが、実はそれにつづいて

四季の中で夏は一番よい季節である。
四季の中で秋は一番よい季節である。
四季の中で冬は一番よい季節である。

と、あるのだそうです。これは大変考えさせられる文章だと思うのです。T氏は、こういう話を紹介せられたのち「ここに現代中国の逞しい生き方がうかがわれる」と結んでおられるのでありますが、私もなるほどと感心させられます。春や秋がよい季節だということはよくわかりますが、夏も冬もまた、一番よい季節だと教えているところに、味わって見るべき問題点があります。

私たちは一体どうでしょうか。夏が来れば早く秋が来ればよいと思い、冬が来れば早く春が来ればよいと思っている。しかし暑い夏、寒い冬に満足できない人は、結局、春が来ても秋が来ても、やはり不平を云っている人ではないでしょうか。現在の季節に満足できない人は、結局どんな季節にも満足できない人ではないでしょうか。逆に、暑い夏にも寒い冬にも、それぞれにその季節の喜びを感ずることの出来る人だけが、春にも秋にも本当の喜びを満喫することの出来る人ということができましょう。ですから中国の教科書にある四行の文章は、別の表現をすれば

一年中で今が一番よい季節である。

今をおいて、それ以上によい季節はない。ということになるでしょう。現在を力一杯生きぬけという逞しい生き方、（中略）それが仏教の「諸行無常」の真理が教えるものだといったら、みなさんはさぞ驚かれることでありましょうが、実はその通りなのであります。

『人生の考え方』（百華苑）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています
また、この書籍は平成七年に発行されたものですので、文中に出てくる教科書などもその当時のものになります

プンダリーカ
―白蓮華―
第１００号 令和７年10月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

仕合わせ

本願寺派 司教 内藤 昭文

「しあわせ」になりたいと願わない人はいないでしょう。また、「しあわせ」を否定する考えは嫌われるでしょう。では、その「しあわせ」とは何でしょうか。ここで、質問をしてみたいと思います。みなさん、「しあわせ」と書きなさいといわれたら、どう書きますか。学生に質問したら、「しあわせ」と平仮名で書くといった人が最も多かったですが、漢字ではどう書きますか。私がお話をする所で質問すると、ほとんど「幸せ」と答えがかえってきます。

（中略）

皆さんは国語辞典に「幸せ」の見出し語がないことをご存知ですか。たとえば、「広辞苑」の見出し語は「仕合せ」しかありません。この「仕合せ」は、私の大好きだった歴史小説家の故・司馬遼太郎氏が小説の中で多用していました。この「仕合せ」の「仕」は「ある人につかえること」だそうです。そういう意味では、「めぐりあわせ」や「宿命（宿業）」を意味するといえるでしょう。つまり、生きている中で、辛いこと・苦しいこと・いやなことがあったとしても、振り返って自分の「めぐりあわせ」というか「因縁」を考えて、「仕合せ」と感じる場合のことじゃないかと思うのです。

「仕合せ」と「幸せ」、これらは日本人が「しあわせだ」と感じた内容を漢字で表記したにすぎません。どちらで書こうと全く違ったものを意味しているのではなく、「しあわせ」は「しあわせ」なんだといわれれば、そうだと思います。でも、その「しあわせ」の内容をしっかり見つめることが大切だと思うのです。

親鸞聖人の法然上人との出会い、或いはご本願との出会いは、敢えて漢字で書けば「仕合せ」というべきものだと思います。親鸞聖人の生涯は私たちの感覚からいっても、決して幸せであったとはいえないように思います。幼い頃、両親を亡くされたり、流罪になったり、長男の善鸞を義絶（勘当）したりと、私たちにとっては決して「しあわせ」といえるものではないでしょう。しかし、親鸞聖人はそのことを嘆くばかりではありません。「人間の人生は苦難の連続である（一切皆苦）」であることを真正面から受けとめ、その苦難の中で、法然上人と巡り会えたこと、恵信尼様という妻と出会えたこと、そして何といっても南無阿弥陀仏の御本願に値遇できたことなどに、人として生まれたことを慶び、仕合せを感じられたのだと思います。

『仏伝に聞く仏教』（探究社）より引用
掲載文字数の関係で一部を中略してご紹介していますが、中略している箇所に「幸」の字についての説明が載っていますので、ご覧になりたい方へは西照寺書庫より貸し出しをいたします。
また、本書は平成十一年に発行されたものです。

プンダリーカ
―白蓮華―
第１０１号 令和７年11月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

私への願いに気づけない

本願寺派 司教 安藤 光慈

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

という親鸞聖人のご和讃のことで、以前に「身を粉にして骨を砕くですか？それほどのことですか」と問われて、少し困ったことがありました。

「恩」という字は、「めぐみ・いつくしみ」という意味だといわれますが、その成り立ちを私は「因」＋「心」ですから、「もとになった心」、つまり私が育まれるもとになっている心と味わっています。

私たちは、さまざまなご縁をいただいて生きています。仏教的にいえば、内なる因と外からの縁によって今日の私は成り立っているのです。因縁所生の私です。その縁の中には、私を育み、あるいは変えてくれたものもあるでしょうから、「縁」と「恩」とは少し重なるところもあるようにも思えます。

しかし、「縁」と「恩」とでは、私が捉えようとしているところが違うのです。相手の行いによって私が何か影響を受けたり、変わったりすることがあっても、そこに私に対する思いや願いがなければ、それを「恩」とは思いません。「恩を受けた」という場合には、私に向けられたその心や願いをいただいているということです。つまり恩とは私を育み、変えてくれた「もとになった心」です。

また、「徳」とは功徳のことであり、私あるいは私とその周りの人びとを良い方向へ進ませる力・はたらきのことです。ですから「恩徳」とは、私を良い方向へ進ませようとする思いや願いであり、またその力・はたらきのことをいうのです。

仏さまは、今苦しみ悩みを抱えて生きている私をなんとか救い取ろうと願われ、浄土へ往生させ、この命に確かな意味を与えてくださるのです。私にとってこれほどの恩徳はありません。「報ずべし」「謝すべし」とあるのは、誰かに向かっていっているのではありません。ご恩徳をいただいた私が、私自身に向かって「報じなければならない」「報謝せよ」と命じているのです。

私が少し困ったのは、こうしたことを本当に受け止めていくのには時間が必要だと思ったからでした。身を粉にしても骨を砕いても報謝すべき恩徳であることに、なかなか気づくことのできない私です。

『いのちの栞 如来とわたし』（本願寺出版社）より引用
宮崎県宮崎市眞光寺ご住職であり、本願寺派司教の安藤光慈和上ですが、今年十月一日に六十六歳を一期として往生の素懐を遂げられました。今まで受けた安藤和上の講義を思い出しつつ、和上を偲んで三年前にご執筆なされたものを紹介しました。

プンダリーカ
－白蓮華－
第１０２号 令和７年12月
浄土真宗本願寺派 西照寺 saishoji.info

聞き方

本願寺派 勧学 深川 宣暢

阿弥陀如来のご本願をどのように聞くのかというと、親鸞聖人は、

仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。

（『顕浄土真実教行証文類』）

と、こう仰っておられます。

「疑心あることなし」とは「疑う心あることなし」です。これは、単に「疑わない」ということではありません。疑心が有るとか無いとかというレベルを超えているということです。つまりは「ああ、そうですか、そうだったのですね」と聞かせていただくのが、「疑心有ること無し」という聞き方です。要するに、本当のことなのだから疑うも疑わないもないのです。事実の有様を述べたのが仏法であります。事実の有様というのは、「そうだったんですね」と聞くしかないじゃありませんか。

たとえば、「今朝は、お日さまが東から昇ってきて西に沈んでいった。しかし、明日の朝はどうであろうか？ひょっとしたら、北の方から上がってくるかしら？いや、いや、私は東の方から昇ってくると信じて疑わない…」なんてね、これは疑うとか信じるというレベルの話ではありませんね。

お日さまというのは、東から昇って西に沈む、そうなっている。われわれが信じているかいないかということとは関係なく、お日さまは東から昇り西に沈んでいく、そういう話です。ですから、真実とか、本当のことというのは、「そうでしたか」と聞いておくしかないのであります。

世の中には、賢い人とそうでない人、賢者と愚者とがおります。

本当の賢者というのは「私が知っていることは、ほんの毛の先ほどのこと。もっと知りたい！もっと教えてくれ！もっと聞きたい！」と思っておりますから、いくらでも成長するんです。

実は、大いなる愚者というのもこれと同じなのです。「私は何ほどのことも知ってはいない」と思っていますから、教えてくれた人に感謝ができます。「ありがとう！ようこそ教えてくださった！」と、これが愚者の姿です。本当の賢者、大いなる愚者が素晴らしいのです。

よろしくないのは中途半端な人ですね。「少し賢い」と書いて「小賢しい」と読むでしょう。小賢しいのはよろしくありません。

「私が言うことのどこが間違いだというのだ」と、人の話を聞きません。自分の思うことが正しいのだと言うばかりですから成長もありませんし、感謝もしません。まさに小賢しい知恵です。

少なくとも仏さまの話、仏陀の話を聞くという時には「そうでしたか、そうだったんですね」と聞くことになっておるんです。いくら言っても仏さまの智慧に比べたら我々は愚者なんですからね。

『そのままの救い』（龍谷大学宗教部）より引用